



京大広報

No. 707

2015.1



「エコ〜るど京大・冬の陣」においてトップ鼎談を実施(左から, 浅利美鈴 環境安全保健機構(附属環境科学センター)助教, 山極壽一 総長, 門川大作 京都市長, 新貝康司 日本たばこ産業株式会社副社長, 井澤 萌氏(教育学部3回生))
—関連記事 本文4345ページ—

目次

〈巻頭言〉

新しい年を迎えて 総長 山極 壽一……4330

〈大学の動き〉

第2回ASEAN+3学長会議に森 純一 国際交流推進機構長が出席……4331
アムジェン, アムジェン財団, 本学および東京大学の合同で「Amgen Scholars Program」への参加を発表……4331
エジプト日本科学技術大学(E-JUST)に本学のインフォメーションセンターを開設……4332
第61回京都大学未来フォーラムを開催……4333
USJI 国際シンポジウム「京都発! 日本観光立国宣言」を開催……4333
総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催……4334

新年名刺交換会を開催……4334

〈部局の動き〉

本学宇治キャンパスと京都府宇治市との連携に関する協定を締結……4335

〈寸言〉

交わりて信 野村 明雄……4336

〈随想〉

トクヴィルの教訓 名誉教授 木村 雅昭……4337

〈洛書〉

琵琶湖のほとり 山内 裕……4338

〈荣誉〉

長尾 真名誉教授(元総長), 間野英二名誉教授, 村松岐夫名誉教授, 和田英太郎名誉教授が日本学士院会員に選ばれる……4339

〈話題〉

宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催……4341
宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催……4342
第56回11月祭を開催……4342
松田祐司 理学研究科教授, 中家 剛 同教授が仁科記念賞を受賞……4343
社寺見学会を実施……4344
能楽鑑賞会を開催……4344
エコ〜るど京大・冬の陣を開催……4345
化学研究所「第114回研究発表会」を開催……4346
安里和晃 文学研究科特定准教授がフィリピン大統領賞を受賞……4347
医学部附属病院において若手職員向け研修を実施……4347

〈日報〉

……4348

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

巻頭言

新しい年を迎えて

総長 山極 壽一

新年明けましておめでとうございます。歴史的な降雪により、元旦の京都は真っ白に塗り替えられました。新しい時代を迎えるにふさわしい年になるだろうと期待しております。

昨年10月に新体制が発足し、めまぐるしい毎日をご過ごしてまいりました。赤崎 勇先生のノーベル物理学賞、森 和俊 理学研究科教授のアルバート・ラスカー基礎医学研究賞、稲葉カヨ先生のロレアル・ユネスコ女性科学賞など、すばらしい成果が相次ぎ、硬式野球部の田中英祐君がプロ野球ドラフト会議において、千葉ロッテマリーンズから指名を受けたり、陸上競技部が全日本大学駅伝に42大会ぶりに出場したりするなど、課外活動でも全国の注目を集める快挙がありました。文武両道に優れた京都大学の力が発揮され、とてもうれしく思っております。

総長の就任式で、「ゴリラのように泰然自若」という私の座右の銘を述べましたが、その後「学生と教員が一体となっておもしろいことを発想する」という目標を掲げ、京都大学が歩む指針としてWINDOW構想を立ち上げました。大学を社会や世界に通じる窓として位置づけ、有能な学生や若い研究者の能力を高め、それぞれの活躍の場へと送り出す役割を大学全体の共通のミッションとして位置付けたいと思ったからです。

大学の教育とは、知識の蓄積と理解度だけを向上させるのではなく、既存の知識や技術を用いていかに新しい発想や発見が生み出されるかを問うものです。京都大学は単に競争的な環境を作るのではなく、



分野を超えて異なる能力や発想に出会い、対話を楽しみ協力関係を形作る場を提供していきたいと考えています。そういった出会いや話し合いの場を通じて野生的で賢い学生を育て、彼らが活躍できる世界へ通じる

窓を開け、学生たちの背中をそっと押して送り出すことが、私たち京都大学の教職員の共通の夢であり目標であってほしいと思います。

昨年末には衆議院選挙が行われ、長期安定した政権が維持される見通しとなりました。昨今、政府が提案している大学改革は着実に実行されていくでしょう。そこで、第3期中期目標・中期計画を見据えた改革の加速期間である現在、大学が直面している状況を正しく認識し、その改革へ向けて指針を提示し、実行計画を立ててまいります。現在、具体的な指針や計画を検討中であり、各方面からのご指摘やご批判をいただいたうえで、『京大広報』号外により、皆様にお示ししたいと思いますので、皆様の積極的なご意見を頂戴したいと思っております。

昨秋、総長就任時に述べた課題とその対応策は、現在検討中の「京都大学の改革と将来構想」に反映してまいりたいと思っておりますので、ご理解をいただき、温かいご支援、ご協力を賜れば幸いです。

今年も皆様にとってよい年でありますことを祈念して、年初の挨拶とさせていただきます。

【山極総長スペシャルサイト「総長、本音を語る」を公開中】

京都大学ホームページでは、山極総長の素顔に迫るスペシャルサイト「総長、本音を語る」を公開している。

同サイトでは、山極総長からのメッセージ、インタビュー動画、総長への12の質問など、総長の「本音」を伝えるコンテンツが掲載されているほか、「山極壽一×京都大学」(総長の京大への思いや、熱いビジョンについて)、「山極壽一×ゴリラ研究」(総長が長年研究に携わってきたゴリラ研究に寄せる熱い思い)の動画版独占インタビューも視聴できる。

山極総長スペシャルサイト <http://www.kyoto-u.ac.jp/voice/>



大学の動き

第2回 ASEAN + 3 学長会議に森 純一 国際交流推進機構長が出席

本学が学術交流協定を締結しているAUN (ASEAN University Network)を核に日本、中国、韓国の3カ国を加えたASEAN+3の、第2回学長会議が11月6日(木)、7日(金)にタイのチェンマイ大学にて開催された。本学からは山極壽一 総長の代理として森 純一 国際交流推進機構長と柴山守 ASEAN拠点所長および事務職員(若手人材海外派遣事業ジョン万プログラムによりASEAN拠点で研修中)が出席した。2日間の会議には、本学を含めた12カ国32大学が参加した。

1日目には、Niwes Nantachit チェンマイ大学長の歓迎の挨拶の後、日本の文部科学省、中国、韓国の教育関係省、ASEAN事務局からそれぞれ代表者が、ASEAN+3の大学間の協同、連帯強化の可能性について講演を行った。続いて、AUN加盟大学および日中韓からの参加大学の代表メンバー間で、学術研究、学生教育、大学方針等における連携発展



ASEAN+3 大学間の今後について意見を述べる森機構長
(前列右から二人目)

について活発な討議とワークショップが行われた。

2日目には、ネットワーク間での平成24~25年度の活動報告と成果の確認を行うとともに、今後の活動展開について検討し、また、次回以降の学長会議についても確認した。

AUNは、平成4年に第4回ASEANサミットで提案され、同7年に創立した国際大学連合で、世界各地と学生交流、研究者交流や共同研究を実施し、地域内の人材育成の開発に取り組んでいる(現在、ASEAN加盟10カ国30大学加盟)。本学とAUNは平成21年に学術交流協定を締結し、協力して様々な活動を展開している。本学では今後も、毎年開催される各種イベント、シンポジウムや学生向けのフォーラム、スピーチコンテスト等に、学内から参加者を募り、積極的に国際ネットワークを強化していく。

(研究国際部)



記念品贈呈の様子(左から、Rome Chiranukrom チェンマイ大学副学長、森機構長、柴山拠点所長)

アムジェン、アムジェン財団、本学および東京大学の合同で「Amgen Scholars Program」への参加を発表

本学はアムジェン財団から2年間の支援を受けて学部学生を対象としたサマープログラム「Amgen Scholars Program」を実施することとなり、11月19日(水)に東京大学伊藤国際学術研究センターにおい

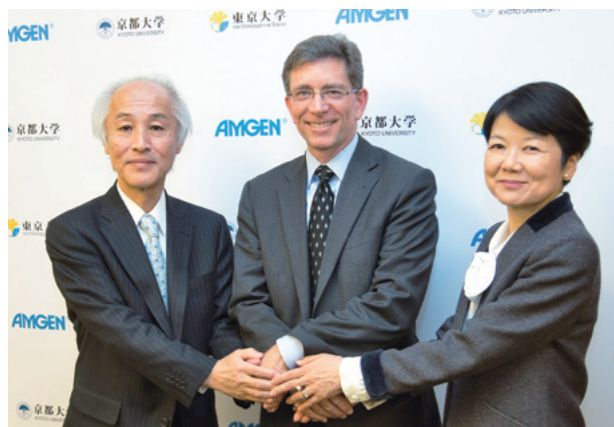
てアムジェン、アムジェン財団、本学および東京大学の合同で記者会見を開催した。

このプログラムは、世界的に有名な大学にて最先端の研究を体験してもらい、次世代を担う研究者を

育てるものであり、日本からは本学以外に東京大学も新たに参加機関として加わった。

本学からは杉万俊夫 学生担当理事・副学長が出席し、プログラム概要と共に本学の将来構想との関連について説明があった。

本学のプログラムは、2015年7月1日～8月28日の約8週間で実施され、受入予定学生数は25名(うち海外の大学の学生20名、本学の学生5名)で、理学研究科、医学研究科、工学研究科、農学研究科、生命科学研究科、地球環境学舎の6部局・22研究室で学生を受け入れることを予定している。採択された学部学生は研究室で研究現場の最前線を体験するほか、課外活動やポスターセッション等のイベント



(左から)杉万理事・副学長、デイビッド M. リース アムジェン米国本社バイスプレジデント、江川雅子 東京大学理事に参加する予定である。

(研究国際部)

エジプト日本科学技術大学(E-JUST)に本学のインフォメーションセンターを開設

11月25日(火)にエジプトのアレクサンドリアにあるエジプト日本科学技術大学 Egypt-Japan University of Science and Technology (E-JUST)に京都大学インフォメーションセンターを設置し、その開所式を行った。E-JUSTは、日本の国際協力機構(JICA)の支援を得て設立されたエジプトの国立大学で、日本の大学コンソーシアムが教員を派遣し、現地での教育・研究の支援に当たっており、本学は日本側幹事大学の一つとしてそのプログラムに参画している。

今般、E-JUST内の九州大学リエゾンオフィスは日本の幹事大学4校(京都大学、九州大学、東京工業大学、早稲田大学)が共同オフィスとして利用することとなり、本学もそこにインフォメーションセンターを設置することとなった。

開所式は、長期派遣の平松幸三 名誉教授(E-JUST 創造理工学類長アドバイザー)、中村康一 学際融合教育研究推進センター特定准教授(E-JUST材料工学専攻支援)、吉元健治 同特定准教授(E-JUST化学石油工学専攻支援)および幹事大学代表の出席のもとに開催され、本学インフォメーションセンターの銘



開所式でのテープカット(左から平松名誉教授、吉田啓二 電気電子情報工学類長アドバイザー、鈴木正昭 第一副学長、Ahmed Magdy Ibrahim El-Gohary E-JUST学長、市村禎二郎 エネルギー環境化学工学類長アドバイザー)

板が設置された。

インフォメーションセンターでは、本学への留学案内などの情報提供や、本学からの派遣教員のアドバイスを得られることとなり、エジプトやアラブ世界との学術交流や学生交流に貢献したいと考えている。

(研究国際部)

第61回京都大学未来フォーラムを開催

12月2日(火)、本学文学部卒業生でボストンコンサルティンググループ日本代表の御立尚資氏を講師に迎え、京都大学未来フォーラムが百周年時計台記念館において開催された。

講演の中で御立氏は、今、世界は「変化の時代」に入っており、人口変動、デジタル革命、あらゆるものの金融商品化という三つの大きな要因によって、今後数十年間は大きな変化が続くであろうとの考えのもとに、歴史を振り返りながら、変化の時代においてリーダーに求められるものや、未来に向けて考えていくべきことについて語られた。



講演をする御立氏

参加者からは「分かりやすい時代分析で、時代を読む新しい視点が得られた」、「世の中の流れについて考えるきっかけができた」、「リーダーの役割が明確になった」、「現場と歴史に学ぶ意義を再認識した」、「肌感覚や現場を実際に体験することの大切さを実感し、自分も取り組みたいと思った」などの感想が寄せられた。



会場の様子

(渉外部)

USJI 国際シンポジウム「京都発！日本観光立国宣言」を開催

本学を含む日本の8大学連携で活動している日米研究インスティテュート(USJI: U.S.-Japan Research Institute) (※)が主催する国際シンポジウム「京都発！日本観光立国宣言」を12月6日(土)に同志社大学寒梅館にて開催し、大学関係者、企業関係者、政府関係者、一般参加者等合計約200名が参加した。

本学からは、USJI副理事長を務める森 純一 国際交流推進機構長と、研究国際部職員が運営側として参加した。

シンポジウムでは、近藤誠一 同志社大学経済学部客員教授・前文化庁長官、村田晃嗣 同大学長の基調講演の後、門川大作 京都市長が歴史的景観を守るための京都市の取り組み等を紹介した。

続くパネルディスカッションでは、前川佳一 経営管理大学院特定准教授、松山大耕 妙心寺退蔵院副住職、池坊由紀 華道家元池坊次期家元の他、京都の学術、宗教、伝統文化、産業界から6名のパネリストが、日本の魅力と課題をグローバルな視点から語り合い、観光立国としての展望と可能性を提言した。

今回のシンポジウムを含むUSJIの各種活動状況や成果報告は、日本語・英語の両方で、ワシントンから発信している。本学も、米国開催プログラムへの研

究者・学生派遣等、今後も引き続き、情報提供、支援を行っていく。



パネルディスカッションの様子

(※)【日米研究インスティテュート(USJI)】

2009年にワシントンD.C.に設立した米国NPO法人で、九州大学、京都大学、慶應義塾大学、筑波大学、東京大学、同志社大学、立命館大学、早稲田大学が連携して運営。学術基盤をもとに政策提言型の研究を行い、セミナー等で戦略的に情報発信する最先端研究拠点として、「研究活動」、「人材育成」、「コミュニティ形成」の各種プログラムを実施している。本学からは京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラムにより職員1名をワシントンD.C.本部に派遣中。また、年2回の研究イベント(USJI Week) 参画や学生研修プログラム(KAKEHASHI, TOMODACHI 等)への派遣等を行っている。

<http://www.us-jpri.org>

(研究国際部)

総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催

12月15日(月)、百周年時計台記念館2階国際交流ホールにおいて、総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催した。これは毎年恒例の国際交流イベントとして平成12年から開催されており、本学で教育・研究に携わっている外国人研究者と、総長、理事・副学長等役員および部局長をはじめ、外国人研究者と関わりのある本学教職員との交流を深めることを目的としている。

今回は、遠隔地の研究所も含めた研究科・研究所・センター等合わせて38部局から、外国人研究者・日本人教員等合わせて220名以上の参加があった。



森機構長による司会

交歓会は、森 純一 国際交流推進機構長の司会・進行によって開会した。今年10月に就任した山極壽一 総長の開会挨拶では、自身のこれまでの研究者としての歩みを紹介するとともに、交歓会がそ

れぞれの研究分野の垣根を越えた学際融合的な議論の場となるよう望むことなどが述べられ、会場は和やかな雰囲気にも包まれた。続いて稲葉カヨ 国際担当理事・副学長による乾杯の発声があった後は、参加者



稲葉理事・副学長による乾杯の発声

者の間で研究内容などをテーマに活発な歓談が交わされ、会場のあちこちで談笑の輪が広がった。また、



山極総長による開会の挨拶



交歓会の様子

数年続けて家族で参加している外国人研究者も多くみられ、久しぶりの再会を喜ぶなど、日本滞在中の家族同士での交流の機会ともなった。食事メニューでは、宗教や信条の多様性に配慮したベジタリアンメニューやハラルメニューなども揃い、また、会場では昨年度に続き本学の国際交流行事がスライドで流され、よりいっそう懇談を盛り上げた。

約2時間の交歓会は、森機構長の挨拶により締めくくられ、余韻を残しつつ閉会となった。

(研究国際部)

新年名刺交換会を開催

平成27年1月5日(月)、恒例の新年名刺交換会を百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて開催した。沢田敏男、井村裕夫、長尾 真、尾池和夫、松本 紘の歴代総長をはじめ、多くの名誉教授、理事・副学長、監事、部局長、教職員など約200名の参加を得て、盛大に行われた。

まず、山極壽一 総長より新年の挨拶が行われ、昨年は森 和俊 理学研究科教授のアルバート・ラ

スカー基礎医学研究賞受賞を初めとする成果が相次いだこと、課外活動でも硬式野球部の田中英祐君がプロ野球ドラフト会議において千葉ロッテマリーンズから2位指名される快挙があったことなどが紹介された。また、今後大学改革の加速に伴い、機能強化の面で世界水準の教育研究を目指すとともに、地域貢献を重視しながら本学のプレゼンスを高めていくこと、平成28年度から合計100人程度の学生を別



新年の挨拶をする山極総長

枠で入学させる特色入試を実施すること、高大接続に取り組んでいくことなどが説明され、これまでの歴史を踏まえながら本学の歩む道とともに考えて行きたいとの所感が述べられた。

引き続き、沢田元総長の発声により乾杯し、あちらこちらに歓談の輪が広がった。

(総務部)

部局の動き

本学宇治キャンパスと京都府宇治市との連携に関する協定を締結

宇治キャンパスと京都府宇治市との連携協定締結式が11月25日(火)に宇治市役所で執り行われ、宇治キャンパスからは岸本泰明 エネルギー理工学研究所長(宇治地区部局長会議代表世話部局長)、辻井敬亘 化学研究所副所長、津田敏隆 生存圏研究所長、川瀬 博 防災研究所副所長、疋田 覚 宇治地区事務部長など10人余が出席し、宇治市からは山本 正 宇治市長、木村幸人 副市長、石田 肇 教育長の他、各部長が出席した。岸本所長と山本市長が、協定書に署名を交わし、今後の連携について確認した。

宇治市と宇治キャンパスとのつながりは年々深まりつつあり、最近では、異常気象に伴い、宇治市でもしばしば発生した豪雨災害での支援も契機となり、特に防災分野において協力関係が進展していた。

また、宇治キャンパスでは地域・社会の方々との交流を目的として、毎年、キャンパス公開やたそがれ花見コンサートを実施しており、たそがれ花見コンサートに宇治市の中学生が出演するなどの連携活動を行ってきた。

このような中、今年4月4日(金)に行ったたそがれ花見コンサートに山本市長が来訪され、そこでの対話を契機に、宇治キャンパスと宇治市との連携協力を一層進展させる機運が生まれた。それ以降、両者で意見交換を重ね、本協定の締結式を迎えるに至った。

本協定は、主に教育、研究、防災・災害対応、広報等の分野において相互に協力することにより、宇



左から、握手する岸本所長と山本市長

治キャンパスの研究環境の充実とともに、宇治市における社会の発展に資することを目的としたものであり、岸本所長は「本連携協力が、宇治市と宇治キャンパスが互いに手を携えながら、力強く発展・成長していく原動力になることを期待している」と挨拶し、山本市長は「宇治市の次代を担う子供たちの未来を切り拓くためにも、最高峰の英知を持つ京都大学との連携はたいへん重要である」と挨拶し、その後、来賓の田中準一 京都府山城広域振興局長から祝辞があった。

今後の具体的な取り組みについては、宇治キャンパスと宇治市とで相談・検討のうえ、実施していく予定である。

なお、宇治キャンパスが、連携協力に関する協定を締結するのは宇治市が初めてとなる。

(宇治地区事務部)

寸言

交わりて信

野村 明雄



企業という組織に長く居て、最近、思うことがあります。

昭和33年に本学を卒業した時と現在との世の中の違いは、いわゆる日進月歩の“情報化”の差ということに尽きます。今では、あらゆる分野の過去の情報を、何人も平等に、素早く入手できる仕組みが整っています。しかし、人間と人間を繋ぐ信頼関係を構築するための努力は、当時も今も変わるところはありません。というのも、ネットのインターフェイスは人の心まで開くことのできる道具ではないからです。

情報化のツールがどれだけ発達しようと、決して代替できないもの、それが、人間同士が協働して社会を、企業を発展させてゆく力です。私自身、説法がましいことを申せる身ではありませんが、「交わりて信」こそ、いま組織人、企業人に求められる精神、態度だと考えます。

「組織は人なり」、「人は城、人は石垣」などと言いますが、一人ひとりがどれほど有能であっても、また、情報の蓄積があっても、それらがバラバラでは力を発揮することはできません。組織というものは、各々の強みを活かして、あるいは不足するところを補いながら、全体としての戦力の最大化を図ります。組織が強くなり、大きな力を得るためには、土台となる石と石がしっかりと組み上げられ、人と人が固く結びついていることが必要です。そして、その間を繋ぐ、^{つよ}勁くて、しなやかな紐帯こそが信頼関係にほかなりません。

個人としても、会社で責任ある立場となり、大局的な見地、長期的な展望が求められるようになるにつれ、社内外の様々な分野の人とのネットワークが必要になります。経営者の多くは、長い会社生活の中で、より広い領域の、自分に無い能力を持った人たちとのネットワークに支えられて業績を挙げ、それによって顧客に、株主に、地域社会や社員に報いることができると言えます。また、こうした交流を

通して、日頃から知らず知らずの内に職業人、社会人としての方向感覚と直観力が養われてゆきます。

その際、いわゆる「人脈」という言葉で表されるような付き合いは、功利的であるが故に効用も限定的で、長くは続かず、やがて離合集散します。「百術は一誠に如かず」は刻石の箴言であります。逆に、互いの利害得失を超えた、人間としての尊敬、共通の価値観で結ばれた関係は、その多くが持続的で掛けあえないものとなります。

昔から「君子の交わりは淡き水の如し」と言いますが、幅広い外の世界の“良友”との交わりは淡水の如くあるべきです。一方、共通の目的を持ってストラグルするチームの人間関係となると、それは出处進退を共にする“僚友”、つまり「^{ぶんげい}剏頸の交わり」にほかなりません。

このように良友と僚友、様々な人間のネットワークがあり、いずれも大切であることは言うまでもありません。大いなる自省を籠めて言うならば、それらのネットワークを構築してゆくための心構えは、まさに「人の為に謀りて忠」であり、「朋友と交わりて信」となります。相手に何かをする時には「忠」、つまり、真心をこめて行おうということです。

また、「夫子の道は忠恕のみ」とも言います。この「恕」というのは思い遣りということですが、端的には相手の立場に立って、物事を考える広い心ではないでしょうか。私の経営の師が頼まれて揮毫される字は、いつも「恕」でした。これは古今の変わらぬ真理であり、リーダーとしての素養であると言ってもよいでしょう。

我々は人間の一生を通して、信頼、真心、そして思い遣りを実践することによって、良友・僚友のネットワークを築き、磨き上げてゆきます。その過程こそが、その人自身の人間成長であり、社会人として、企業人としての“人間力”を決定づけるものだと言っても過言ではありません。

「忠・信・恕」という言葉の真実が稀薄になった、皮相なビジネス社会が生まれつつある兆しに危惧を覚えるのは私だけでしょうか。

(のむら あきお 大阪ガス株式会社相談役 昭和33年法学部卒業)

随想

トクヴィルの教訓

名誉教授 木村 雅昭

トクヴィルは19世紀フランスの歴史家、政治思想家であるが、その代表作の一つにフランス革命を論じたものがある。そこで彼は、フランス革命とは過去と断絶して全く新しい世界を切り開こうとしていたにもかかわらず、その



実、旧体制の延長線上に登場してきたものであり、旧体制の諸特徴が、増幅された形で革命後の世界に受け継がれたという、注目すべき見解を展開していた。いまでもその彼の分析は正当に評価され、我が国でも邦訳(『旧体制と大革命』ちくま学芸文庫)が刊行されるようになったが、1960年代、70年代にはフランス革命論の傍流に押しやられていた。しかしトクヴィルは私が愛好する思想家であったから、70年代の初めに読んでみて、その分析の卓抜さにすっかり魅了されてしまった。

彼の分析は私自身に大きな影響を与えたが、しかしその後、にわかに現実的な意味合いを帯びるようになってきた。ベルリンの壁の崩壊は、政治経済的な視座の根底的な転換をもたらし、市場経済を不死鳥のように甦らせるにいたった。来るべき世界は西欧的な政治経済システムによって支配されるであろうという論考が次々と生み出されるようになったが、しかし私自身、こうした見解にどうしてもなじめなかった。というのも市場経済へと舵を切ろうとしていた地域は多様で、ロシアや中国を含めて西欧と異質な歴史的传统を有している国々も少なからずあり、改革は一筋縄ではゆかぬと思ったからである。

そこで当時の風潮に批判的な視点から、折にふれ私なりに色々論じてみたが、そこには以上のようなトクヴィルの分析が影を落としていたことは否めない。もっとも、ベルリンの壁の崩壊から始まった一連の政治経済改革はいまだ進行中である。特に経済グローバル化の波はとどまるどころをしらず、その結果、各地の多様な政治経済システム間の差異は次

第に消え去り、世界はフラット化するという考えさえ登場した。もとよりこの動きに決着がつくのはかなり先だが、しかしアングロ・サクソン型とライン型資本主義との差異は未だ健在であり、我が国のシステムも独特である。このことは、それぞれが得意とする産業分野の違いに鮮明に現れている。この意味で、確かに市場経済化は創造的破壊を繰り返しつつ進展してゆくものの、その動きはある一つのシステムへと収斂してゆくのではなくて、歴史的传统に見合った独特の政治経済体制が形成されては解体してゆくといった経過をたどるかもわからない。いずれにせよ市場経済へと至る道のりは、これまでのところ紆余曲折に満ちたものであり、フラット化とは程遠い様相を呈しているであろう。

それにしてもなぜ歴史的传统は、かくも大きな影響を及ぼしているのであろうか。その分析は、個々の国々、地域ごとに地道になされなければならないことはいまでもない。この意味で、ここで大雑把な議論を展開することは慎むべきだが、あえて言えば改革、革命に支持を与える大衆はもとより、それらを先導する人々でさえ、自分を育ててくれた精神文化的伝統の呪縛から脱することがなかなかできないこと、さらに批判の対象となっている制度にはその国の精神文化的伝統が染みこんでおり、その革新は容易でないばかりか、新しく考案された制度がいつの間にか旧来の伝統によって換骨奪胎されてしまうといったことに、その原因の一端を求めても不当ではなからう。

この意味でわれわれは好むと好まざるとにかかわらず、歴史に強く縛りつけられている。もとより現実とそれをとりまく環境は日々新たであるから、あることをなすにあたって過去に先例を探し求め、それを忠実に踏襲することは慎むべきであるが、しかし個々の事例の背後にある歴史的传统を無視する時、往々にして歴史に復讐され、とんでもない結果を招くこととなる。この四半世紀の目まぐるしい動きとそこで繰り返された数々の混乱は、この歴史の重みを論証しているように思われるのである。

(きむら まさあき 平成18年退職、元法学研究科教授 専門は比較政治学)

洛書

琵琶湖のほとり

山内 裕

風吹かば、風吹くままに。
波立たば、波立つままに。そぞろヨットのはかなさを知る。

叡山三千尺、天地の恵み豊かなる、琵琶湖のほとり、これぞ我が神陵の地なり。

いざ歌わんかな、琵琶湖周航の歌。アイン、ツバイ、ドライ—我は湖の子 さすらいの・・・



琵琶湖周航歌が生まれた場所というのがある。大津市三保ヶ崎の琵琶湖疎水取水路のほとりの旧第三高等学校(三高)艇庫である。この木造の艇庫からボートで出発し、琵琶湖を一周するのが琵琶湖周航である。三高の学生であった小口太郎が、琵琶湖周航中にこの歌詞を思いついたと言われている。これが三高の寮歌となり、本学に歌い継がれ、今でも同窓会などでは歌われている。

艇庫は1912年(大正元年)に三高艇庫として建設された。ここで三高の学生が戦前はボート、戦後はヨットに乗っていた。1950年(昭和25年)の三高閉校にともない、ヨット部卒業生が三高ヨットクラブを設立し、活動を続けた。1959年には京都大学の学生が加わり、神陵ヨットクラブという名前に変更し、その後50年以上活動を続けている。冒頭の文章は、周航歌を歌うときの掛け声である。ちなみに、神陵とは吉田山(神楽岡)のことである。水辺にある木造の建築物はすぐに腐ってしまう。それが100年以上も保存できたのは、代々学生が使用し続けたからである。三高卒業生の方が校章のペンキを塗り直しに時折艇庫にやって来られた時期もあったという。いまや木造建造物として歴史的文化財に価すると専門家から評価されている。

1年ほど前、この艇庫が解体されることになった。数年にわたって神陵ヨットクラブに入部する学生が少なく、卒業生の支援で維持してきた。その間、OB組織のリーダーシップのもと、三高同窓会自昭会や京都大学への移管などを目指して活動してきたが、どれも成功しなかった。最後の学生の卒業を間近に、卒業生だけでは維持できないという結論にな

り、解体するという判断が下った。防火防犯などの点からも放置するのは無責任であり、解体は当然の判断であった。

しかしどうしても解体できなかった。艇庫を自らの手で解体するということによって、何か重要なことが失われるような気がしたからである。そこで、少数の有志とともに、艇庫を引き取るようになった。艇庫をどのように活用するのかを考えなければならなくなった。地代などの資金繰りだけでも大きな負担であるし、皆忙しい日程の合間に集まって議論している状態であり、苦しい活動である。また、この艇庫という建物を利用して新しい持続的活動を生み出すことは、社会のデザインを掲げるデザイン学大学院連携プログラム(デザインスクール)のテーマとしても最適であったため、授業でも取り上げている。

我々はよく「伝統」を掲げるが、伝統とは何か？私は社会学者として、伝統という概念の背景には力への意志があることを理解している。「伝統がある」という主張は、伝統があるものを客観的に説明しているのではなく、そこで「伝統」を作り上げ、自らを正当化し、力を示す実践である。一方で、全ての行為は伝統に根差している。我々は時に自由な意志に従って、あるいは論理的に行動していると思っているが、それは歴史的に構築された様々なことを暗黙の前提として疑わず受け入れるから可能となっているにすぎない。伝統は我々に刻み込まれ、それを意識しない日々の実践の中で、自らを開示する。そして、伝統は抽象的な観念ではない。日々の実践は常に物質的であり、艇庫はその物質性の一つにすぎない。

つまるところ、伝統を守るということはそういうことだろう。伝統に関する言説の多くにおいて、伝統が一つの実体であるかのように措定されるとき、伝統は自らを開示するのとは逆に秘蔵する。艇庫を保存しようとするだけでは伝統は守られない。我々には伝統が自らを開示するような実践に従事すること、つまり伝統を生きることが求められる。社会をデザインするということは、そのような実践に他ならない。京都大学が伝統を掲げるということは、我々がこのような実践の学を作り、学をそのように実践しなければならないということだろう。

(やまうち ゆたか 経営管理大学院講師 専門は経営学、サービス科学、デザイン学)

栄誉

長尾 真名誉教授(元総長), 間野英二名誉教授, 村松岐夫名誉教授, 和田英太郎名誉教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび、長尾 真名誉教授(元総長), 間野英二名誉教授, 村松岐夫名誉教授, 和田英太郎名誉教授が日本学士院会員に選ばれた。以下に各氏の略歴, 業績等を紹介する。

長尾 真名誉教授(元総長)は、昭和34年京都大学工学部電子工学科を卒業、同36年に同大学大学院工学研究科修士課程を修了後、京都大学工学部助手、講師、助教授を経て、同48年教授に就任し、有線通信工学講座を担当された。その後、平成8年大学院工学研究科に配置換となり、通信情報工学講座を担当された。昭和61年から平成2年まで大型計算機センター長、同4年から同6年まで評議員、同7年から同9年まで附属図書館長、同8年から同9年まで総長特別補佐、同9年から工学研究科長・工学部長など学内の要職を歴任された後、同9年12月に第23代京都大学総長に就任され、6年間総長として大学の管理・運営に尽力され、また、同13年4月から同15年6月まで国立大学協会会長として国立大学法人法の作成に尽力された。平成15年12月任期満了により退官され、名誉教授の称号を受けられた。退官後は平成16年から同19年まで独立行政法人情報通信研究機構初代理事長、同19年から同24年まで国立国会図書館長を務められ、同24年8月独立行政法人科学技術振興機構科学技術情報特別主監に就任され、現在に至っている。

先生は、画像や言語という情報メディアを用いた



知的な情報処理に関する研究に力を注ぎ、パターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳、電子図書館の分野において多くの優れた研究成果を挙げられた。中でも、自然言語処理、機械翻訳の分野では、先生は世界に先駆けて機械翻訳の研究を推進し、日英、英日翻訳システムを完成・実用化させるとともに、機械翻訳に用例を用いる新しい翻訳方式を提案し、その後の機械翻訳研究に大きな影響を与えた。また、画像処理の分野では、フィードバック解析機構を導入した顔写真の認識システムや黒板モデルを用いたリモートセンシング画像などの複雑な自然画像の解析システムは、人工知能的手法による画像処理の分野を開拓したものとして国際的に大きな影響を与え、その後の研究に大きく貢献された。その後、これらの研究成果の上に立ち、マルチメディア情報処理、デジタル通信機能を包含した総合的情報処理システムとして電子図書館の研究を行い、そのプロトタイプシステムを開発し、図書館の情報化の推進にも貢献された。

今回の日本学士院会員への選出は、これまでの幅広い先生の一連の業績が高く評価されたものであり、大変喜ばしい。

(大学院工学研究科)

間野英二名誉教授は、昭和36年3月京都大学文学部史学科(東洋史学専攻)を卒業、同41年3月同大学大学院文学研究科博士課程を終え、京都大学研修員・ハーバード燕京東方学研究日本委員会奨励研究生を経て、同43年4月大阪大学文学部助手となられた。昭和44年9月より同47年6月までハーバード大学大学院へ留学、帰国後の同年12月に京都大学文学部助教授(西南アジア史学講座)に就任された。昭和61年3月には「14-16世紀中央アジア史研究」の学位請求論文により文学博士の学位を取得され、同年4月より文学部教授に昇任された。平成14年3月に停年退官され、京



都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後は龍谷大学文学部の特別任用教授を経て、現在同客員教授を務めておられる。

同名誉教授は、東洋史研究室で直接指導を受けられた宮崎市定、田村實造、佐伯 富、佐藤 長博士らの文献史料の厳密な読解に基づく実証的な歴史研究をよく継承され、また語学について羽田 明、大地原豊教授らの薫陶を受けながらイスラーム時代の中央アジア史研究を進められた。大阪大学助手時代に書かれた論文「ティムール朝の社会」(旧版岩波講座・世界歴史8, 昭和44年, 所収)や本学助教授時代に上梓された『中央アジアの歴史』(講談社現代新書, 昭和52年)は同名誉教授の俊英な歴史研究者としての卓抜にして非凡な才能を明示している。

同名誉教授の主要な研究業績は、ムガル帝国の創設者バーブルの回想録『バーブル・ナーマ』のチャガタイ・テュルク語原典、総索引、日本語訳、研究篇を完備した『バーブル・ナーマの研究』全4冊(松香堂、平成7-13年)にまとめられ、このうち研究篇『バーブルとその時代』によって平成16年第94回日本学士院賞を受賞された。同名誉教授の業績は、本学の東

村松岐夫名誉教授は、昭和37年3月に京都大学法学部を卒業後、同年4月京都大学法学部助手に採用され、同39年5月助教授、同51年教授に昇任された。平成7年4月から同9年3月まで法学研究科長・法学部長を務められ、同15年3月に定年退官、京都大学名誉教授の称号を受けられた。平成15年4月より同21年3月まで学習院大学法学部教授を務められ、また現在は、同20年4月より就任された日本学術振興会学術システム研究センター副所長を務めておられる。この間、日本政治学会理事長、日本行政学会理事長等、学会の要職も多数歴任された。



同名誉教授の研究は、官僚制研究、圧力団体研究、中央地方関係論を中心に、現代日本の政治体制を多角的かつ実証的に分析したものであるが、それぞれの分野においてそれまでの通説を覆すような新しい見方を提起し、様々な証拠にもとづいてそうした仮説を実証し、早くから国際的業績として公表した点に大きな特徴を持つ。具体的には、官僚制を政治家や政党から超越した支配層と捉える「官僚優位論」が

和田英太郎名誉教授は、昭和37年3月に東京教育大学理学部を卒業、同39年3月同大学大学院理学研究科修士課程を修了、同42年3月同博士課程を修了し、理学博士の学位を授与された。その後、昭和42年3月東京教育大学理学部教務補佐員、同年11月東京大学海洋研究所助手、同51年4月三菱化成生命科学研究センター主任研究員、同52年2月同研究所室長、平成元年4月同研究所部長、同3年7月京大大学生態学研究センター教授、同8年4月同センター長、同13年4月総合地球環境学研究所教授を歴任し、同14年4月京都大学



洋史、中央アジア研究の水準の高さを世界の学界に示す空前の偉業であり、西南アジア史学を志す後進の研究者必読の書となっている。

今回の日本学士院会員への選出は、これまでの同名誉教授の一連の業績が評価されたものであり、大変喜ばしい。

(大学院文学研究科)

従来を通説的な理解であったのに対し、政党、政治家のリーダーシップをより大きく評価する「政党優位論」や圧力団体の影響力を認める「多元主義」モデルを、また中央政府が地方自治体を統制してきたと捉える「垂直的行政統制モデル」に対して、地方自治体の自律性を射程に入れる「水平的政治競争モデル」を提起され、政治家、官僚、圧力団体の指導者に対するエリート・サーベイなどの分析を通じてこれを実証された。同名誉教授は、このエリート・サーベイを三次30年に渡って継続され、戦後日本における政治システムの構造と変容を「政官スクラム型リーダーシップ」の形成、崩壊として描かれた。同名誉教授が積極的に導入された実証分析の手法は、後進の研究者に強い影響を与え、政治学、行政学の新時代を画した。またこのような実証的、社会科学的な日本政治分析は、海外の政治学者や、国内の他分野の研究者にも高く評価され、数々の国際的、学際的共同研究を生み出した。

今回の日本学士院会員への選出は、これまでの同名誉教授の一連の業績が評価されたものであり、まことに喜ばしい。

(大学院法学研究科)

名誉教授の称号を受けられた。平成16年8月総合地球環境学研究所名誉教授、同16年8月海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター生態系変動予測プログラムプログラムディレクター、同21年4月同機構地球環境変動領域特任上席研究員を経て、同23年3月退職。その後、平成23年12月より海洋研究開発機構フェロー、同26年5月日本地球惑星科学連合フェローとして今日に至る。

同名誉教授は40年以上前から自然界における窒素・炭素の安定同位体比の分布に関する研究を行い、 ^{15}N の食物連鎖による濃縮現象を発見して一般式を提示し、 $\delta^{15}\text{N}-\delta^{13}\text{C}$ 関係において安定同位体食物網モデルを提案された。同名誉教授の安定同位体

フィンガープリント法は「安定同位体生態学」、「安定同位体生物地球化学」として新たな研究分野の創設につながり、生態学、地球化学、分析化学、人類学、食品科学、環境科学など幅広い研究の基礎となっている。これらの成果により、分野の壁を越えた安定同位体手法による総合的研究の発展に貢献された。地球環境問題が人類共通の課題となっている現在、地球上の物質循環の改変と生物多様性の消失は大きな問題となっている。そのなかで、安定同位体比の情報がこれだけ広い研究分野に利用可能であることを示したことは、大きなインパクトを与えるものである。

これらの業績に対して、昭和48年4月には日本海洋学会岡田賞、平成7年11月には日本地球化学会賞、同13年12月には地球化学研究協会学術賞(三宅賞)、同20年6月には日本学士院エディンバラ公賞、同21年3月には日本生態学会賞をそれぞれ受賞され、また、平成25年秋の受勲において瑞宝中綬章を受章された。

今回の日本学士院会員への選出は、これまでの同名誉教授の一連の業績が評価されたものであり、大変喜ばしい。

(生態学研究センター)

話題

宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催

宇治キャンパスにおいて、外国人研究者・留学生に対する支援の一環として、11月10日(月)にリサイクルフェアを開催した。

宇治地区関係者から家庭に眠っている遊休品の提供を受け、無償で外国人研究者・留学生に提供するリサイクルフェアの開催は今年で9回目となり、例年と同様、外国人研究者・留学生と教職員との交流会も同時開催した。



リサイクルフェア会場

リサイクルフェア会場となった、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースでは、関係者の協力により集まった約500点の物品が並べられ、研究者・留学生や、その家族など70名を超える来場者があった。毎年大人気のこの催しは、机やタンスなどの家具から電化製品、布団、衣服、食器や鍋といった日用品、子供用雑貨やおもちゃなど様々な物が出品

され、单身者にも家族連れにも喜ばれている。

リサイクルフェア会場隣の交流会会場では、自己紹介タイムが設けられ、参加者はお茶を片手に和やかな雰囲気の中、お互いの交流を深めた。

また交流会コアタイムには、宇治地区研究所の所長も参加し、岸本泰明 エネルギー理工学研究所長の挨拶の後、青山卓史 化学研究所副所長、SANGA-NGOIE Kazadi 生存圏研究所教授の紹介があった。その後引き続き行われた電化製品等の抽選会で、会場は大いに盛り上がった。



抽選会景品授与

宇治キャンパスでは、外国人研究者540名(年間)、外国人留学生100名程度が研究のために来訪、滞在中であり、今後もこういった生活支援事業を続けていく予定である。

(宇治地区事務部)

宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは11月18日(火)、宇治事業場衛生委員会主催ならびに総合環境安全管理センター共催による安全衛生講習会を宇治おうばくプラザにおいて開催した。

この講習会は、宇治地区の教職員や大学院生等を対象に「年間安全衛生管理計画」の一環として開催しているもので、今回は上床輝久 環境安全保健機構健康管理部門・健康科学センター助教による、「ストレスのない職場環境を目指して～メンタルヘルスマネジメント～」と題した講演があった。

講演では、職場におけるストレスは、仕事の能率を低下させるだけでなく、うつ病や不安障害などの疾患を引き起こす場合があることや、健康で充実した職場環境の実現には、個人だけでなく、組織全体

が一つになって取り組む姿勢が大切になることについての解説があった。

また、ストレスが身体に与える影響とそのメカニズム、適切な睡眠習慣、問題解決のための思考法や環境の調節などについて、対人関係ストレスを中心に、詳細な解説があった。

参加者は熱心に聞き入り、講演後も質疑応答が続いて盛会のうちに終了した。

(宇治地区事務部)



講演を行う上床助教

第56回11月祭を開催

第56回目となる11月祭が11月21日(金)～24日(月・祝)に吉田キャンパスで開催された。

キャンパス内は100店舗以上の模擬店が出店し、おまつり広場特設ステージ(吉田南グラウンド)でのライブや、山極壽一 総長の講演などのさまざまな催しが行われた。連日好天に恵まれたこともあり、学生のみならず、家族連れや中高生など多くの人でにぎわった。

最終日にはおまつり広場でフィナーレのファイヤーが焚かれ、4日間にわたる祭典の幕を閉じた。



おまつり広場特設ステージ



本部構内の様子



おまつり広場でのフィナーレ

(学務部)

松田祐司 理学研究科教授，中家 剛 同教授が仁科記念賞を受賞

このたび、松田祐司 理学研究科教授，中家 剛 同教授が仁科記念賞を受賞し，12月5日(金)に東京會館において授賞式が行われた。

仁科記念賞は今年で第60回という長い歴史を持つ賞で，日本の現代物理学の父と呼ばれ，湯川秀樹，朝永振一郎の師でもある故仁科芳雄博士の功績を記念し，原子物理学とその応用，さらに原子物理学に深い関連のある研究に関し，優れた研究業績をあげた研究者に授与される。

松田教授の受賞理由は，「重い電子の2次元閉じこめによる新しい電子状態の創出」である。電子の集団が，強いクーロン反発力により相互作用し合う系の振る舞いを解明することは，現代物理学の中心的研究課題の一つである。このよう



松田教授

な効果の最も顕著な金属状態は，重い電子系化合物とよばれる希土類化合物で実現され，そこでは伝導電子の有効質量が自由電子の数千倍に達することがある。同教授らの研究グループは，世界ではじめて重い電子を2次元空間に閉じこめることに成功し，これにより，バルクの系では実現が不可能であった異常な金属状態や超伝導状態の創出を可能にした。2次元空間の重い電子やその界面では，新奇な機構による超伝導状態などの，様々な新しい物理現象の実現が期待されている。

中家教授の受賞理由は，「ミューニュートリノビームからの電子ニュートリノ出現事象の発見」で，T2K実験(東海-神岡間長基線ニュートリノ振動実験)国際共同研究グループをともに率いる高エネルギー加速



中家教授

器研究機構(KEK)素粒子原子核研究所の小林 隆教授との共同受賞である。同教授らが行うT2K実験では，岐阜県飛騨市神岡町にある巨大ニュートリノ検出器である「スーパーカミオカンデ」に向けて，295km離れた茨城県東海村の大強度陽子加速器施設(J-PARC)からミュー型ニュートリノのビームを打ち出す。平成25年7月にはミュー型ニュートリノが電子型ニュートリノへ変化する「電子型ニュートリノ出現現象」が存在することを世界で初めて明らかにした。この成果により，電子型，ミュー型，タウ型の三世代あるニュートリノ世代間での振動現象のうち，未解明だったミュー型ニュートリノから電子型ニュートリノへの振動確率を解明し，今後ニュートリノでのCP対称性の破れの研究につながる手がかりを得ることが出来た。



仁科記念賞授賞式での記念写真
前列右から，松田夫妻，小林夫妻，中家夫妻，
後列左から3番目が小林理事長(2008年ノーベル物理学受賞)

授賞式は150人ほどの出席者があり，小林 誠 仁科記念財団理事長(日本学術振興会・学術システム研究センター所長)から受賞者に表彰状と盾が授与された後，各受賞者が，受賞に関する関係者各位への感謝の意と今後の研究の抱負について簡単なスピーチを行い，なごやかな雰囲気の中，終了した。

(大学院理学研究科)

社寺見学会を実施

12月6日(土)、平成26年度社寺見学会「晩秋の長浜をたずねて」が行われ、50名が参加した。当日は、かなりの雪が降る中、向源寺、大通寺、慶雲館(滋賀県長浜市)を巡り、参加者は寒さに震えながらも、それぞれの専門分野の講師の解説を興味深く聞いていた。

向源寺では国宝の十一面観音立像を、大通寺では本堂などを見学した。その後、参加者は黒壁スクエ

ア等を自由散策し、思い思いに長浜の街を楽しんだ。慶雲館に到着する頃には、ようやく雪も止み、雪で視界を遮られることなく、庭園を楽しむことができた。

当日、解説いただいた講師は次のとおりである。

(歴史) 西山良平(人間・環境学研究科 教授)

(建築) 山岸常人(工学研究科 教授)

(造園) 柴田昌三(地球環境学堂 教授)

(美術) 根立研介(文学研究科 教授)



慶雲館にて記念撮影



(総務部)

能楽鑑賞会を開催

12月17日(水)、第58回京都大学能楽鑑賞会が、京都市左京区の京都観世会館で開催された。本会は、創立記念行事音楽会とともに本学学生・教職員のための課外教養行事として毎年開催しているものである。

今回の演目は、狂言「魚説経(うおぜっきょう)」と能「山姥 白頭(やまんば はくとう)」で、会場には毎年心待ちにしている方や初めて鑑賞される方など

多くの来場者が訪れた。狂言では経を知らない出家が魚の名を連ねてごまかそうと説法を始める場面などで笑いに包まれ、能の山姥が舞う場面では、鼓や笛の音も相まって会場全体が舞台に引き込まれている様子であった。

本会を一つの契機に、特に学生に日本の伝統芸能・文化への興味と関心を一層深めてほしい。



狂言「魚説経」



能「山姥 白頭」

(学務部)

エコ〜るど京大・冬の陣を開催

持続可能な社会の実現に向けた「働き方」、「生き方」を考える企画として、「エコ〜るど京大・冬の陣」を、12月8日(月)、9日(火)に百周年時計台記念館2階国際交流ホールにて開催した。

持続可能な社会の実現に向けては、環境や農業、社会貢献、国際課題の解決などが求められる。そこで、それらをキーワードとした18の企業や省庁、地方自治体、NPO団体、学生団体等が展示ブースを



展示ブースに集う学生

出し、仕事や働き方、将来のビジョンなどについて、直接話を聞き、学べる機会を提供した。通常の就職関連イベントでは見られない情報提供、例えば就農を支援するような仕組みの紹介や国際支援にかかわる仕事へのキャリアパス、環境問題に総合的／専門的に取り組む幅広い企業、環境問題に力を入れる地方自治体なども出展した。両日に渡り、1回生から院生、また市民らが、熱心に話を聞く場面が見られた。

同時に「先輩トークセッション」として、七つのトークイベントを実施した。環境問題や農業の現在・過去・未来、社会貢献やソーシャルビジネスなどをテーマとしたセッションのほか、多様な働き方やキャリアパスを知る機会にするため、タレントとして活躍する紫野レイさんやフリーランスの道を選んだ食・科学ライターのサリーさん、同じ部活出身でそれぞれの道を歩み活躍するOBらのトークも行われた。また、8日には、「持続可能な社会の実現に



若き日の写真をバックに語る山極総長

向けて」をテーマに、山極 寿一 総長、門川 大作 京都市長、工学研究科出身で日本たばこ産業株式会社の新貝康司副社長によるトップ鼎談が行われ、それぞれの若き日の写真なども公開しながらのトークに大変盛り上がった。いずれも、質疑の時間には、働き方や進路選択、起業等を考える学生の熱心な質問が寄せられ、充実したセッションとなった。



交流パーティーの様子

イベントの最後には、社会人と学生の混成チームでゲームをしながら交流するパーティーを開催した。学生団体らによるオリジナル料理も提供され、楽しく美味しい時間となった。

2日間、様々な企業・団体・登壇者(先輩方)を迎え、多様な働き方への気づきを与え、知識を共有することができた。3月には就職活動生向けに、関連企業・団体の合同就職説明会を予定しており、持続

可能な社会の実現を支える人材輩出につながることを期待している。

※「エコ〜るど京大」とは、エコ×世界(ワールド)からの造語であり、「Think globally, Act locally, Feel in the

Campus !」のメッセージをこめると同時に、京大の中でエコを学ぶ学校(Écoleとはフランス語で学校)を期間限定で開校する意味もこめたものである。

(環境安全保健機構(環境科学センター))

化学研究所「第114回研究発表会」を開催

化学研究所は、12月12日(金)に宇治おうばくプラザ きはだホールを主会場として第114回研究発表会を開催した。

午前には、大野工司 准教授が「ポリマーブラシ付と複合微粒子の精密設計と応用」、FRISCO-CABANOS, Heide L. 研究員が「Synthetic Molecules that Protect Cells from Anoikis and Their Use in Cell Transplantation」、小川紘樹 助教が「放射光GISAXSを用いた高分子表面・界面の構造解析」、吉田弘幸 助教が「新しい有機半導体の電子親和力測定法と有機エレクトロニクスへの応用」に関する研究発表を行った。

午後からは、京大化研奨励賞・京大化研学生研究賞の授与式と受賞者4名(同奨励賞：茅原栄一 助教、TEX David 研究員、同学生研究賞：長田浩一 理学研究科博士課程2回生(有機元素化学研究領域)、MOHAMED Ahmed Mohamed 薬学研究科博士課程3回生(生命知識工学研究領域)が講演した。(同学生研究賞受賞の西村秀隆 工学研究科博士課程2回生(構造有機化学研究領域)は必修講義のため欠席)

また、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースでは69件のポスター発表が行われ、その後、昨年度の「化研らしい融合的・開拓的研究」に採択された6件(吉村智之 助教「仮想的超短寿命キラル分子の検出」、脇岡正幸 助教「直接的アリアル化重合による π 共役系高分子の一次構造制御合成法の開発：実験・理論の融合型アプローチ」、LE, Quang Phuong 研究員「Investigation of photocarrier dynamics in



受賞者と時任所長(左から、MOHAMED氏、長田氏、時任所長、David研究員、茅原助教、西村氏(右上))

perovskite-based solar cells」、山田泰裕 特定准教授「高誘電率材料の誘電遮蔽効果を利用したナノ構造物質の光学特性制御」、佐藤良太 助教「高性能低白金コアシェル型ナノ粒子触媒：ナノ構造の精密制御と精密構造解析」、竹内勝彦 助教「Synthesis and Applications of Non-Innocent PNP-Pincer Type Phosphaalkene Ligands」の報告があり、いずれも活発な質疑・討論が行われた。

本研究発表会は、一般、専門機関、研究所内から延べ170名を越える参加者を得て、最先端の多彩な研究成果がわかりやすく発表された。また、ポスター発表にも多数の参加者があり、盛況のうちに終了した。終了後には、教職員・大学院生らが多数参加して、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースで懇親会が行われた。

(化学研究所)

安里和晃 文学研究科特定准教授がフィリピン大統領賞を受賞

安里和晃 特定准教授が12月5日(金)、フィリピン大統領賞受賞式に出席し、Benigno S. Aquino III フィリピン大統領からKaanib ng Bayan 賞を授与された。

この賞は、グローバル化するフィリピン人コミュニティにおいて、フィリピンの発展に寄与し、在外フィリピン人に対して顕著な貢献を行った人々に対して贈られる賞である。安里准教授はアジア研究、移民研究を専門にしており、これまで農村出身学生に対する奨学金事業、震災時におけるフィリピン人コミュニティ支援、在外フィリピン人移民支援などに従事してきた。本学では京都市内の小中学校でフィリピン系児童・生徒に対する学習支援活動を行い、その結果をフィリピン政府と協働で移民に対する渡航前研修で報告する事業を実施している。また、フィリピン政府職員と日本における移民の実態を調



Aquino III フィリピン大統領と握手する安里准教授

査し、人身売買事案なども告発してした。

(学際融合教育研究推進センター)
(アジア研究教育ユニット)

医学部附属病院において若手職員向け研修を実施

医学部附属病院では、11月～12月にかけて計4回にわたり、院内の若手職員向け研修を実施した。今回の研修では、主に主任以下の若手職員を対象とし、各課の相互理解を深め、業務の効率化および職員のスキルアップを図るために、各課それぞれの業務内



講話を行う山木事務部長

容や課題について発表を行う研修であった。12月3日(水)に実施された研修では、山木宏明 医学部附属病院事務部長からの講話が行われ、「京都大学医学部附属

病院の基本理念を常に意識し、自らの仕事を行うことがより良い病院運営に繋がる」ということが伝え



研修に参加した若手職員

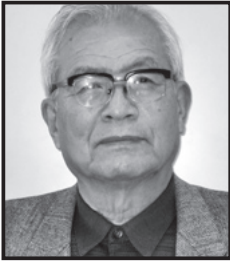
られた。各回ともに30人以上の職員が参加し、若手のみならず掛長や課長級職員の参加も見られた。質疑応答も活発に行われ、各回の予定時間を超過するほどであった。

(医学部附属病院)

訃報

このたび、^{まつおたかよし}松尾尊兌名誉教授、^{まつばらたけお}松原武生名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

松尾 尊兌 名誉教授



松尾尊兌先生は、12月14日逝去された。享年85。

先生は、昭和28年京都大学文学部史学科国史学専攻を卒業後、京都大学人文科学研究所助手となり、同46年に京都大学文学部に移り、助教授を経て、同56年教授に昇任、史学科現代史学講座を担当された。平成5年3月に停年退官され、京都大学より名誉教授の称号を授与された。

退官後は、平成14年まで京都橘大学文学部教授を務められた。

先生は、戦後日本を代表する歴史家の一人であり、大正デモクラシーの研究で不朽の業績を残された。特に、普選運動の研究および吉野作造、石橋湛山に代表される反・非帝国主義、反・非植民地主義

の潮流の研究は先生によって開拓されものであり、現在もそれを超える研究は存在しない。また、先生は人物評伝の分野でも珠玉の好編を多数残された。学問上の著作としては『大正デモクラシーの研究』（青木書店、1966）、『大正デモクラシー』（岩波書店、1974）、『普通選挙制度成立史の研究』（同上、1989）、『大正デモクラシーの群像』（同上、1990）、『大正時代の先行者たち』（同上、1993）、『民本主義と帝国主義』（みすず書房、1998）、『滝川事件』（岩波書店、2005）、『わか近代日本人物誌』（同上、2010）、『近代日本と石橋湛山』（東洋経済新報社、2013）、『大正デモクラシー期の政治と社会』（みすず書房、2014）のほか、戦後史に関わるものとして『国際国家の出発』（集英社、1993）、『戦後日本への出発』（岩波書店、2002）がある。

(大学院文学研究科)

松原 武生 名誉教授



松原武生先生は、12月15日逝去された。享年93。

先生は、昭和18年9月大阪帝国大学理学部物理学科を卒業、同大学特別研究生を経て、同24年6月に大阪大学理学部助教授に就任された。昭和27年4月には理学博士の学位を授与された。昭和27年6月に北海道大学理学部教授に就任された後、同30年1月京都大学基礎物理学研究所教授に着任、同35年理学部に配置換となり、長年にわたり学生の指導、後進研究者の育成に尽力された。昭和60年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。また日本物理学会会長、文部省学術審議会専門委員等の要職を歴任された。

先生は統計物理学・物性物理学の分野で多くの著大な業績をあげられた。特に誘電体、超伝導、超流動などの相転移現象に関して精力的な理論研究を行われた。時代を超えて、"Matsubara"の名前を世界に知らしめた業績は、基礎物理学研究所に在職されていた昭和30年の松原グリーン関数(あるいは温度グリーン関数)の発明である。松原グリーン関数は物理学に現れる量子多体現象の理解に著しい進歩をもたらし、場の理論や統計力学には欠かせない基礎理論として確立されている。統計物理学・物性物理学の研究を世界的に牽引した優れた業績により、昭和36年11月仁科記念賞を受賞、同47年3月東レ科学技術賞を受賞された。また、昭和61年4月紫綬褒章、平成3年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院理学研究科)